

NPO

女性のための支援へ。 東北人がつなげる現地と支援者

仙台市

足立 千佳子 NPO法人まちづくり政策フォーラム理事

取材日

2011.6.4

関係諸団体との協働を基にまちづくりに関わる調査研究等を行い、豊かな地域社会の形成に貢献する事を目指し活動に取り組む。震災後はRQ市民災害支援センター登米現地本部で、ボランティアの受付窓口や諸々の事務作業を一手に引き受ける「総務」を経験。その後女性のための支援センターを立ち上げ、被災女性の支援に力を入れている。

落ち込んでいた3月

震災のショックは大きかった。自分はそれほど被害がなかったが、沿岸部のたくさんの人が亡くなってしまった。本当に目の前が真っ暗になった。私はもともと住民参加の地域づくりが専門。今まで関わっていたり、これから一緒に取り組む予定だった地域が津波で流されたり、ともに活動していた知人たちが亡くなってしまった。「まちづくりをしましょう」と夢のあることばかりを言っていたのに救えなかった、という思いに悩まされた。過去にはハザードマップのワークショップも行った。なぜもっと真剣にやらなかったんだろう！もっともっと分析してここがどれくらい危ないということがわかっていたら、もっと違ったハザードマップが作れたんじゃないか、今回の震災で活かすことができたんじゃないか。防災計画にしても、地域づくりにしても、もっともっと踏み込んでいろんなことをすれば、いろんなことができたはずなのに。

私がやってきたまちづくりはちっぽけだなと、3月はひどく落ち込んでいた。

RQ市民災害支援センター 登米現地本部へ

各地からいろんな人が来て受け入れが始まり、現場の人達は何をしているのか気になっていた。そこに知人が、現場のことをわかっているコーディネイト役が必要だと言うのを聞いた。東京や関西、全国から大勢のボランティアが駆けつけて熱心に救援活動をしてきているが、現地の地域性などが理解されず、もしかすると被災地ですれ違いが生じているかもしれないという。3月28日に突然RQ市民災害支援センターに行くことを決めた。

現場に行くと、やはり東北人ならではの「なかなか言えない」状況があった。何度も足を運んでお茶っこ*しながら話を聞くと、おばちゃんたちから「実は洗濯干すとこねんだ」「着替えつとこね



んだ」と後から後からいろいろな話が出てくる。いくら現地調査票を送っても、それを書くのはお父さんたちで女性は書かない。だから、困っている女性達の声は聞こえてこないのだ。

女性のためのホットライン

避難所に支援物資は確かに届いているが、配布者は男性だ。例えば下着が届いた時、男性の前で選べるだろうか。生理用品は袋ではなくナプキンを1個ずつ渡す人もいたそう。女性としてはせめて何かに包んで欲しいし、人によって必要な種類・個数は違う。支給品が無くなったと言えば係りの人に「もう無くなったのすかや」と言われてしまう。こんなにも性教育がされていないのかと驚いた。間仕切りがない避難所も多く、体育館に雑魚寝をしていて着替えはもぞもぞと布団の中でする。食事当番になれば1日中立ちっぱなし。それなりに役割分担はあるが、お父さん達が働きに出れば避難所に残る女性達に食事当番の負担がかかる。女性達はこんな状況で何か言えるだろうか。今まで当たり前にかけていたものを全て失った。だから「雨露をしのげるだけで幸せ」？本当にそうだろうか？自分を大切にすることの重要性を認識してほしいと思う。3月11日前の生活に戻る権利は誰にでもある。

化粧品を送ろう、体にあう下着を送ろうと活動を始めた。お金を渡せば女性たちは家族の物を優先して自分の物は絶対に買わない。だから「物」での支援が必要だと思っている。

6月1日から被災女性を支援するためのRQ被災地女性支援センターを立ち上げた。電話をもらったら課題に応じて解決していこうと考えている。避難所では個別ニーズ調査も行った。年代、身長、下着や靴のサイズなどプライベートなことを聞くため、番号で管理するなどプライバシーには配慮した。そのおかげもあってか、対象となる400余名中300余名から回答があり、ニーズの高さを実感した。

被災者とボランティアの心がふれあう瞬間

「災害ボランティア」は深刻な印象を受けるが、正直に言って不謹慎かもしれないが「楽しい」。「男はやんだ」としかめっ面をしているおばあちゃんが、男性にハンドマッサージをしてもらいながらいろいろなお話しをしてくれる。終わるとニコニコしながらつるつるになった手を何度もなでる。帰る時には玄関先まで手をつないで「また来て」と言ってくれるのが嬉しい。口実を作ってまた行くと「あの時のお姉ちゃんまた来てくれたの、お茶っこ飲むべ」と言ってくれる。心と心がふれあう瞬間は本当に嬉しい楽しい。

逆に牙になって向かってくることももちろんある。踏み入れてはいけない領域に入ってしまった時、「あんたたちボランティアはどうせあったかいところに帰れるんだべ」と言われたりもする。でも、私が仙台から来ていて体育館に寝泊まりしているということがわかると、「あらなんだべや」とちょっと変わってくれる。避難所をまわって頼りにしてもらえたり、いろいろな相談をしてもらえたりすることが、役に立てて嬉しいと感じる。東北の人のニーズは東北人でなければわからない。ずっと地元にいるおばあちゃんたちは東京や関西の言葉はわからないという。そういう点では私がいる意味があるのかなと思う。東北の言葉やちょっとした機微もわかる仙台の人にはもっと現地に入ってほしい。RQに来てくれたボランティアにこうなんだよと現地事情を話すと皆「えー、そうなんですか!?!」と驚かれる。現地の状況をボランティアに伝えることも大事だし、逆に現地の人に「今こういうことだから言わねばダメだべっちゃ」と言う立場なのかなとも思う。

現場に飛び出してよかったと思った。避難所の中でいろんなコミュニティができてきて、助けあうことをお手伝いすることもできた。これから仮設に入った後も一緒に何かしていけたらいいなと思

う。やっぱり私は地域づくりが好きなんだなと思った。コミュニティをちゃんと作っていく事、各地域でそれぞれの人達が主人公になるようなことを考えて、実現するにはどうしたらいいかなと思いつくのが好きだ。

ボランティアしたいと思っている人達へのメッセージ

ぜひぜひ現場に来てほしい。

どこでも人手は足りていないし、行けばさまざまな活動がある。行けば邪魔になるんじゃないだろうか、役に立てるだろうかと考えるくらいなら、一度現場に入ってみてほしい。もちろん行く前には「ボランティアの心構え」は読んでから。

もっと多くのボランティアに来てほしいし、ぜひ仙台の人にはもっと来てほしい。

=用語解説=

■「お茶っこ」

漬物とお茶を用意し、隣近所の人が集まりおしゃべりしながらお茶を飲むこと。取り皿や箸はなく、手のひらを皿の代わり漬物をのせ、指でつまみながらお茶を飲む宮城特有の習慣。



RQ登米現地本部となった、旧鱒淵小学校体育館